

資料 4



THE CENTER FOR PSYCHOLOGICAL STUDIES OF DISASTER

災害心理研究所

福島大学

原子力災害が 福島で暮らす小学生，幼稚園児と保護者に与えた 心理的影響に関する調査結果報告 (第四回調査)

福島大学 災害心理研究所

筒井雄二（共生システム理工学類）

概要

福島大学 災害心理研究所(旧 子どもの心のストレスアセスメントチーム)は、福島県内で生活している子どもたち(1歳6か月児から小学6年生まで)と保護者(4か月児の保護者を含む)を対象に、原子力災害が彼らの心理的健康に与えたインパクトに関する研究を続けています。

WHO (2006), UNDB & UNICEF (2002)など国際機関やロシア、ウクライナの政府によるチェルノブイリ事故に関する報告書は、被ばくによる身体的健康影響や環境汚染の問題に加え、心理学的影響が極めて大きいことをあげています。事故から28年が経過したウクライナでは、現在も事故に起因すると見られる心理的影響が続いています(ウクライナ国立社会学研究所)。

ここでは2014年1月に福島市で幼稚園児と小学生、および保護者を対象に実施した調査(4回目)結果を報告するとともに、原発事故から3年半の福島市における心理的影響の推移について併せて報告いたします。

THE CENTER FOR PSYCHOLOGICAL STUDIES OF DISASTER
災害心理研究所

福島大学

